

挨拶表現にみる日英語比較（下）

後藤いく子（社会言語学）

挨拶が非常に日常的な社会習慣にのっとった言語行動であるからには、日本語及びそれに“対応”する英語の挨拶表現にはそれぞれの社会の文化的背景が色濃く反映されているはずである、との視点から前回と前々回の「挨拶表現にみる日英語比較（上）」及び「挨拶表現にみる日英語比較（中）」では、日本人が普段何げなく用いている「よろしくお願ひします」「すみません」「頑張つてね」「失礼します」「どうも」が使われる複数の場面での英語の表現をアンケートにより見つけ出し、その結果を提示した¹。

本稿ではこの調査結果を基にして、日本人及び英語圏社会の人々のものの見方・考え方、生活習慣に目を向け、それぞれの社会における人間関係を律している基本をとらえてみたい。

5 考察

「違った言語を話す人は違った思考様式・世界観を持つ」という「サピア・ウォーフ仮説」²の妥当性に関して、さまざまな議論がなされ今だに明確な解答はでていないが、今回の調査結果である日英語の表現内容の違いを概観してみると、確かにそこにはタテのものをヨコに“翻訳”する以前に大きな違いがあることに改めて気づかされる。例えば、日本人が「頑張つてね」と言う時に英語圏の人々は“Don't kill yourself”（頑張るな）とか“Take it easy”（気楽にね）等と言うことがわかったが、日英語における本来の意味はまるで正反対なのである。また、日本人が「よろしくお願ひします」と頭を下げる時、彼らは“Nice to meet you”（会えてうれしい）と——相手の目をしっかり見ながら——言うのである。この二つの表現は意味的に正反対とはいえないが、相手に伝えようとしているメッセージはほとんど重なり合わない。一体この違いはどこからくるのだろうか。

鈴木孝夫氏はその著『ことばと文化』の中で、言語の違いは対象世界の切り取り方の違いである、ということをもさまざまな例を用いて示している。例えば、日本語の動詞「のむ」はその行為の対象が液体（水、茶、コーヒー等）、固体（薬、水薬、錠剤、粉薬も含む）、気体（タバコ）のどれであっても使うことができるのに対し、英語の drink の使用条件は液体だけであり、しかも「人の体を維持するのに役立つような液体」に限る（同じ液体でも本来飲物でない洗剤や毒物には swallow、水薬は take、タバコは smoke）と説明し、この違いは日本語の「のむ」が「なにものかを、口をとおして、かまずに、体内に摂取する」仕方に注目している言葉なのに対し、英語の drink は「摂取する対象の形状や性質」に注目している言葉であると述べている。つまり、言葉の意味や使い方には構造があつて、それが言語によって異なっているということである。

また、鈴木氏は同著の中で、イギリスの作家 John Galsworthy の書いた *The Apple Tree* 中の bearded lips (髭のはえた両くちびる) を引用し、「くちびる」という日本語の言語空間(女性が口紅を塗る部分)と英米人が“lips”という語によって切り取っている空間(口をとがらしてとんがる部分で鼻の下を含む)との間には明らかに違いがあることを指摘し、人間なら誰でも持っている「くちびる」のような明瞭な部分ですら、言語が違うと言葉の示す対象の範囲が違うということを明解に示している。

対象世界の切り取り方の違いというのは、言葉を変えて言うならば文化の違いということである。普通、文化の違いという場合、具体的で目に見える現象を指すことが多い。例えば、日本人は挨拶をする時頭を下げるが、西洋人は握手をするという様に³。しかし、目に見えにくい、それだけになかなか気づかない文化の側面もあるのである。そのような文化とは空気の存在と同じく、自覚されにくいものであり、その文化の中で生まれ育った人々にとって当たり前で、それ以外の在り方、やり方などはある筈もないと思っている部分であり、それこそが人々の生活や考え方を隅々まで支配しているものなのである。このかくれた部分に気づくことこそ異文化理解の鍵であり、外国語を学ぶ意義の一つでもあるといえよう。

先に引用した動詞の「のむ」と drink、名詞の「くちびる」と lips 等のような一見“対応”しているように見える語も、その使い方は日英語それぞれの言語全体の構造の中で規定されており、その仕組みをとらえることによって意味するところを理解できるようになる。挨拶に使われる表現も日々何気なく当たり前のように使われており、日常的な社会習慣である以上、その意味するところはそれが使われている社会や文化全体の構造の中で体系的に把握されなければならないだろう。今回の調査結果を分析するにあたり、次の三つの側面、すなわち、

- (1) 自分と相手との関係のとらえ方、
- (2) 日常生活上の価値観、
- (3) 表現内容そのもの、

に焦点をあて、それぞれを

- 1 上下関係 対 対等関係、
- 2 勤労志向 対 リラックス志向、
- 3 慣用的表現 対 個別的表現

という鍵概念の枠組の中で論じていきたい⁴。

1 上下関係 対 対等関係

自分と相手との関係のとらえ方を端的に表している場面の一つとして初対面時の挨拶の言葉(場面1)をあげることができる。日本語では「よろしくお願ひします」が全16回答中15回答の中で使われていた。この表現のうちの「よろしく」は「好ましい、心にかなう、満足できる」⁵ という意味の形容詞「よろしい」の副詞形であり、その意味は「その場の成り行きや雰囲気には適合するようにするさま」⁶ であるから、「よろしくお願ひします」の意味するところは「私がこの場の成り行きや雰囲気に適合するよう、あなたの好意ある取り計らいを期待し依頼する」ということである。このような「相手からの好意ある取り計らい」を暗に要求する言葉が正式な挨拶言葉として成り立っている背景には、相手を自分より目

上であり優位に立つ人であるという前提がこの表現に含まれているからである。人の力を借りずに独力で事を成し遂げられる人でも、日本の社会に受け入れられるためには、相手に対して一步下がってその人の助けを当てにしているという姿勢を示すことが要求される。このことは「いろいろお世話になりますが」（2, 8番）や「右も左もわからない未熟者ですが」（5番）の回答にも反映されている。この他、「どうぞ、ご指導をお願いいたします」（9番）〈この回答のみ「よろしく」が抜けていたため100%にならなかった〉や、「どうぞ厳しくご指導の程よろしくお願ひします」（8番）という回答も見られたが、こちらの表現の方が「よろしくお願ひします」より更に丁寧な表現であると一般に信じられているのは、相手を指導する立場に置くことで相手の優位性を一層強調する言葉だからであろう。日本社会においては「世話」や「指導」を依頼されることは名誉なことなのであり、従って、それを依頼することは敬意を示すことになり礼儀にかなっているのである（Matsumoto）。

日本人と欧米人の行動様式の違いの原点を農耕定住民的基層文化と狩猟遊牧民的基層文化の違いに求める見方が一般的である（荒木、石田、芝垣）が、本稿においてもこの相対的二分法に基づき、極めて大ざっぱではあるが、日本語を農耕定住民族が使っていた一つの言語の発達したものとし、英語を狩猟遊牧民族が用いていた一つの言語の発達したものであると仮定して比較を試みていきたい。それぞれの言語には民族の太古の精神構造が現在も組み込まれており、それがそれぞれの言語の特徴になっているはずだからである。

日本のような農耕民的定住集落において人は生存のための食料を生産確保するために共同で作業に従事せざるをえなかった。このような生活共同体では、お互いが相互依存関係にあるという認識を持つことが不可欠であり、人間関係を結ぶということは相互依存関係に入ることを暗に意味していた。そしてそこで養われる集団意識や相互依存の認識は、一旦成立した相手との絆を「よろしくお願ひ」することによって、永続的なものとして強めていきたいと願うことにつながる⁷。

町内会のお知らせをした後で電話を切る時（場面4）に文脈とは関連のない無意味な「よろしくお願ひします」「よろしく」「お願ひします」が82%の回答に用いられていたが、それは、この表現の根底に「同じ町内に住んでいる者として今後とも絆を切らずに仲良くしていきましょう」というお互いの依存関係を確認し、安心し合うためのメッセージがこめられているからにほかならない。

相手に依存しているという意識は相手に負担をかけているという負い目をも同時に合わせ持つことになる。頼み事をする時（場面2）に「よろしくお願ひします」の他に相手に対して恐縮の念や詫びの気持ちを示す表現である「申し訳ありませんが」「すみません」「ごめんね」が半数以上の回答に添えられているのはこのためであろう。

また、先生にお茶を入れてもらいお礼を述べる場面6においても、「すみません」「申し訳ありません」「恐れ入ります」等の詫びや謝罪の表現が半数以上使われていた。この「すみません」という表現は「済む」に丁寧の助動詞「ます」がついた「済みます」の否定語である⁸が、この謝罪の表現が感謝の表現として使われ得る特殊な事情について、土居健郎氏は『「甘え」の構造』の中で次のように詳しく述べている。

なぜ日本人は親切の行為に対し単純に感謝するのでは足りいとせず、相手の迷惑を想像して詫びねばならぬのか... それは詫びないと、相手が非礼と取りはしないか、その結果相手の好意を失いはしないかと恐れるからである。従って、相手の好意を失いたくないので、そして今後も末永く甘えさせてほしいと思うので、日本人は『すまない』という言葉

を頻発する(土居、27-28頁)。

この一節の中の「今後も末永く甘えさせてほしい」というところを「今後もよろしくお願ひしたい」に置き換えてみても土居氏の意味するところはさほど変わらないだろう。つまり、「すみません」は自分のために被ったであろう相手の負担や迷惑を優先的に考慮し、それに対して詫び、今後とも依存させてほしいという願ひをこめた「謝意表現」なのである。「謝罪」と「感謝」の両方の「謝」を合わせ持つ「謝意」という言葉が存在するのも日本人の人間関係のあり方を端的に示しているといえよう。従って、この「すみません」は、単なる感謝の言葉である「ありがとう」や「ありがとうございます」より、丁寧度の高い感謝の言葉となる⁹。このことは「どうも」の調査項目中でウェートレスに灰皿を取り替えてもらった時にお礼をいう場面2と比べると一層はっきりしてくる。自分より明らかに目上であり、お世話になっている先生に対しては謝意を示すいくつかの表現が使われていたのに、ウェートレスに対しては「ありがとう」(1番)と「どうもありがとう」(2番)等の単なる感謝の言葉が全回答中74%用いられていた。「すみません」(3番)は18%に過ぎなかったのである。

同様のことが「失礼します」の面接試験場の場面1と2についても言える。自分が目上の人の時間や空間へ侵入したことを「礼儀を欠くこと」¹⁰として詫びる表現である。この表現が入室(場面1)する場合にも、また正反対の行為である退室(場面2)の場合にも使えるのは、どちらも相手に対して迷惑や負担をかけ「不躰な侵入をお許してください」という点で変わりはないからである。単なる出会いと別れの代表的表現である「お早ようございます/こんにちは」や「さようなら」には上下関係を意識させるニュアンスが含まれていないので、この様な改まった場面で、しかも目上の人に対しては「失礼します」の方がより丁寧な表現となる。

人と人が初めて会った時に交わされる英語の表現の回答を見てみると78%の人が“Nice to meet you”、“Pleased to meet you”、“Good to meet you”と言っている。これらの表現の文字通りの意味は「あなたに会えて嬉しい」というもので、そこには日本語の表現に含まれていたような相手からの「好意を期待」したり、相手からの「ご指導」を頼りにしているという意味合いは全く含んでいない。それから自分のことを「未熟者」であるとか「お世話になる」と表明するどころか“I’m eager to work with you”(7番)(一緒に仕事ができることを願っています)、“I’m looking forward to working with you”(10番)(一緒に仕事ができるのを楽しみにしています)等と、むしろ最初から相手と対等な者であるという姿勢がうかがえる。このような表現が初対面時に使われる背景には明らかに日本社会とは異なった原理が働いているものと思われる。先ほどの日本人と欧米人の行動様式の違いの原点を農耕定住民的基層文化と狩猟遊牧民的基層文化の違いに求める見方に従い、狩猟遊牧民的生活における人間関係とはどのようなものであったのかを見てみよう。

農耕民族が作物を収穫するためには、同じ集落内の全員が一致協力して作業に従事する必要があり、また時間や自然の制約の前では、自己の力に限界があることも十分認識していなければならなかった。しかし狩猟民族が獲物に出会いその獲物を獲得するためには、自己の力にほぼ全面的に頼るしかなかったのである。獲物との戦いでは時間や自然の条件よりも、むしろ自己の攻撃性や技術が重要であり、それが自己の生命維持のための決定要素となる。獲物との格闘や他の狩猟民族からの襲撃の危険性もあった。このような状況に備えて自分を守るのは自分自身でしかないのだから、こうした状況のもとでは自律の精神

や個の精神が育っていくことになるのも当然といえる。

また、猟場から猟場へと、より良い獲物を求めて転々とする狩猟民族にとって大切なものは、より良い猟場と自分の獲物獲得技術なのである。猟場は農耕民族が汗を流して切り開いた土地とは本質的に違い、あくまでも獲物をとるためのものである。その都度新しく異なる人間を相手にする彼らの移動的生活において、相手との関係は未知であり今後どう発展させていくかは各人の選択の問題となる。お互いの選択によって結ばれる関係は、対等であることが前提となる。

このような生活行動様式を歴史的背景にもった民族にとって、初対面時に言えることとしてはせいぜい“Nice to meet you”（今、現在、会えたことを嬉しく思っている）にとどめざるをえないのである（小林：1981a）。新入社員でありながら、“I’m looking forward to working with you”のような表現が使われ得るのも、対等関係が意識の背景にあるからである。

ただ単に“Hi”、“Hello”（8番）とだけしか言わない回答も3つあったが、これも前述したように¹¹、挨拶がもともと西洋で phatic function ——お互いに相手に対して危害を加える意志がないことや自分が怪しい者ではないことを相手に伝える手段——として発達してきたことを思うと、そのなごりなのかもしれない。

自分と相手との関係を上下関係とみなす背景を持たない英語圏社会においては、面接試験場への入室と退室のどちらの場面にも、相手に対して「詫び」を表現する必要はないのであるから、入室の時には“Hello”や“Good morning”のような単なる出会いの挨拶で十分であり、それが1番から11番まで82%使われていることからもうなずける。退室時には“Thank you”や“Good-bye”等のような感謝と別れの言葉がほとんどであり90%を占めているのも同じ理由からであろう。中には“Thank you for seeing me today”（3番）（今日会って下さったこと感謝しています）や“Thank you very much for this opportunity”（7番）（この機会を与えて下さりありがとうございました）のような相手への配慮に焦点をあてた表現も見られるが、日本語の「失礼します」のような詫びの意味合いは含んでいない。

実際にものを依頼する場面2においてすら、日本語の「頼りにしている」に相当する“I’m counting on you”や“I depend on you”は回答としては全く使われていない。これらの表現は英語の文脈では、相手に有無を言わずすべての義務と責任を押しつけるニュアンスが含まれているため、聞き手は不当な負担を背負わされた様な気分させられるという。各人が対等であり、自律心が期待されている社会において、相手への依頼心をあからさまに示すことはお互いが対等であるという建て前に違反する。相手の人もその“甘え”を束縛と受けとるため、「頼りにしている」と言われることは、特殊な場合を除き英語では名誉なことにはならない。それどころか、相手の領域に無断で侵入することにもなり否定的に受け取られさえする。彼らにとっては、「自分でもやってやれないことはないけれども」頼み事を進んで、快く引き受けてくれた相手に対して“Thank you”とか“I appreciate it”（ありがたく思っています）のような感謝の表現を使う方が、押しつけがましくなく謙虚で礼儀にかなうことになる。これらの感謝の言葉は単独で、または他の言葉と共に、全回答中86%使われている。中には“I’m sorry to bother you”（11番）や“Sorry to be troubling you so”（13番）（ご面倒かけてごめんなさい）等のような恐縮の念を示す表現も見られるが、その後にそれぞれ“I really appreciate your help”（助けてくれてありがとう）や“I’d really appreciate it if you could do this”（これをやって下さると本当にありがたいで

す) 等のように感謝の言葉を必ずつけ加えることによって相手への礼儀を果たしている。

先生の研究室で先生にお茶を入れてもらいお礼を述べる場面6における英語の全回答が単なる感謝の言葉である“Thank you”や“Thank you very much”等であったが、日本語の「すみません」の奥にひそむ依存の意識が英語に不在であれば当然のことである。「どうも」の調査項目中の、喫茶店でウェイトレスに灰皿を取り替えてもらいお礼を言う場面でも英語ではほとんど同じ種類の感謝の表現が使われていた。対等関係が建て前である英語圏社会においては先生に対しても、ウェイトレスに対しても“Thank you”で「済む」のである。

以上、日本語の「よろしくお願いします」「すみません」「失礼します」は、相手が自分より目上であるということを前提とした表現であり、日本人が人間関係を基本的に上下関係でとらえていることを反映している。相手が誰かによって、感謝、出会い、別れの場面で異なった表現が使われることもわかった。

これらと同じ場面で使われる英語の表現に一貫して流れているものは、お互いを自律的個とみなし、基本的に対等関係を前提とする姿勢である。相手に依存している自分であるということをほのめかすことは相対的に上下の序列を意識することにつながり、対等関係のルールに反することになるため英語では相手が誰であるかに関わらず、感謝をする時は“Thank you”、出会いの時は“Hello”、別れは“Good bye”で事足りると思われる。

2 勤労志向 対 リラックス志向

今回の日本語の調査結果の中で筆者の予想に反した回答が三つの場面に見られた¹²。「よろしくお願いします」の項目中で、新しい企画のための会議の後で仕事仲間へ声をかける場面3、「失礼します」の項目中の、職場の顔見知りへ帰りの挨拶をする場面4、それから「頑張ってるね」の項目中で、庭仕事をしている隣りに住む友人へ声をかける場面4である。予測ははずれたが、そのためにかえって興味深い日本人の一面が浮かび上がってきた。それぞれの場面での日本語の回答の特徴を見てみよう。

新しい企画の会議の後同僚同士が交わす言葉として、予想していた「よろしくお願いします」が単独で使われている回答は見あたらず、「何とかうまく行くように頑張らしましょうね。どうぞよろしく」(1番)と、補足的に一度使われているだけだった。残りの回答は「お疲れさまでした」(7番)、「ご苦労さまでした」(8番)の“ねぎらい型”と「頑張らしましょう」(2番)、「頑張ろうね」(3番)等の“頑張ろう型”で、それぞれ約半数ずつの46%と43%を占めている。

一日の仕事の後で職場の同僚へ別れを告げる時にも、予測していた「失礼します」は13%に過ぎず、あとは「お疲れ(さまでした)」(1番)が最も多く15回答中9回答に見られ、「ご苦労さまでした」(2番)も加えると、この“ねぎらい型”は全回答中66%を占める。

また、趣味の庭仕事をしている人に対しても、「ご精がでますね」(1番)、「ご苦労さん」(2番)、「お疲れがでませんように」(3番)、「大変ですね」(4番)、「手間がかかりますでしょう」(5番)等の“ねぎらい型”が半数以上の52%の回答に見られた。予想していた「頑張ってるね」は1回答しかなかった。

これらの場面での英語の回答を概観してみると、相手の苦労、疲れ、骨折りに言及する表現は全く見られない。それどころか、“Well, that sounds good”(なかなか面白そうですね)、“Have a good day”(良い一日を)、“Enjoy yourself”(楽しんでね)等と日本語の回答の意味するところと比べると、その心象風景がまったく異なっている。

日本語では何故「苦勞」「疲れ」「大変」を強調する表現が多く使われ、英語には「面白い」「良い」「楽しむ」を強調する表現が多く用いられるのだろうか。再び先ほどの日本人と欧米人の行動様式の違いに戻って考えてみよう。

農耕定住民的基層文化を原点にした集団の中において、相互に依存し合っているという認識は自分だけ力を抜いたり、怠けたりすることを不真面目で悪いことであるとし、心身を労して勤めることは望ましく良いことであるという価値観を生み出す。日本語の朝の挨拶言葉である「お早うございます」も、農作業にとって早起きは非常に良いことだという道徳律から「よく朝早くから働きますね」と早起きを讃える意味をもっている（荒木：1994、小林：1981b、奥津）。しかし、「お早う」の“英語版”である“Good morning”は“May you have a good morning”や“I wish you a good morning”の省略形であり、もともとは「良い朝でありますように」と相手に願う表現である。これらの表現が異なった発想を起源にしていることは、日本語の「お早う」が別れに際しては使えないのに、英語では“Good morning”と呼びかけながら別れていくことができることからうかがえる（荒木：1994）。この様な勤勞を是とする社会においては、働いた後ではねぎらいの言葉をかけ合うことがお互いの疲れを癒し、怠けていたり不真面目ではなかったことを承認し合い、同じ集団への帰属意識を深めていくことにつながる。

従って、企画会議の後（場面3）や仕事の後（場面4）に“ねぎらい型”の表現が多く使われているのも、根底にこの価値観が流れていることを鑑みると当然であるといえよう。これらの“ねぎらい型”の表現である「ご苦勞さん」「大変ですね」等が庭仕事を楽しみとしてやっている人に対しても使われていることから、この「勤勞志向」が趣味の分野にまで及んでいることがわかる。日本社会において、自分だけ力を抜いたり、怠けたりすることが不真面目で悪いことである以上、趣味とはいえ心身を労して勤めている姿は、力を抜いておらず、怠けていなく、従って真面目で、良い、という評価につながり、それを承認する気持ちが“ねぎらい型”の表現となって表れるのであろう。

相互に依存し合っているという認識は、また、集団の中の個人に「頑張る」、すなわち「困難に屈せず、努力し続ける。忍耐してやりとおす」¹³ ことが期待されることにもつながる。フィットネス・クラブで汗を流している友人に（場面1）、受験に臨む友人に（場面2）、また悩み事のある友人に（場面3）向かって使われる表現は「頑張ってるね」が最も多く、それぞれ64%、80%、62%の回答に見られた。

「頑張る」には上記の「忍耐してやりとおす」という意味以外に「何かを張りつめる、みなぎらす」の意味もあるとし、著書『日本人の行動様式』の中で荒木博之氏はなぜ日本人は頑張るのか、そして相手に「頑張ってる」と励ますのか、について興味深い指摘をしている。

「頑張る」という語が用いられる文脈というのは、個が集団から切り離され、ことをきわめて自律的に処理しなければならないという状況においてである。こういった状況に直面した場合、集団の中の他律的個として機能してきた個というものは、きわめて頼りない、力足りない存在にしかすぎない。それが集団から切断され、ことをきわめて自律的に処理せねばならない状況に立たされた場合、ちっぽけな個はまず第一に個として当然あるべき大きさの個に自分自身をふくらませる必要がある... このようなハンディを背負った人間が相手と対等に戦うためにはさらに気力をみなぎらせて頑張った上にもうひとつ頑張る以外にしかたがないということになる。だから「頑張る」とは萎えしぼんだちっぽけな個が正常の大きさにまでふくらみ、またいちだんと敵と戦いうる力にまでふくれあがるプロセスをさしているといっている。ところがその場合ふくれあがることすらもはや個人の

作業ではない、というところがある。われわれの心は「頑張れよ」という集団の励ましによってしかふくれあがらない仕掛に作りあげられてしまっている(荒木：1973, 67-68頁)。

つまり、日本人にとって「頑張る」ということは一個人の作業のみを指すのではなく、集団及び共同体との関わりが陰にひそんでいるということである。だから、日本語の回答に表れていたように、何らかの作業をこれからしようとする人(試験に臨む友人に対して)や作業が進行中の人(フィットネス・クラブで汗を流している友人や、悩みを解決しようとしている友人)に対しては、「頑張ってね」と激励し、作業の終わった人には「ご苦労までした」とねぎらうことになり、この二つは「勤労志向」の同じ根から出ているといえる。企画会議の後で“ねぎらい型”(46%)と“頑張ろう型”(43%)の回答が約半数づつ使われていたが、この場面を会議の終わりにとらえるならば“頑張ろう型”になり、新しい企画の始まりとみなすならば“ねぎらい型”になるということが象徴的に表われている。

一方、英語の回答には先ほど触れたように、「楽しい」「良い」等を強調する前向きで積極的な言葉が目立ったが、その表現の原点はやはり狩猟民的遊牧基層文化に求めることができよう。狩猟民が獲物を見つけ獲得するまでに要するすべての行動は自己の能力に託されており、武器の選択や猟の方法は個人個人の体力や能力に深く関わっていることは、すでに述べた。獲物の獲得に一度失敗したとしても、彼らは次の対応策をその場で試みることができるのである。稲作の場合と違い、翌年の収穫期まで結果を待つ必要もないし、集落の全員で相談して決める必要もない。狩猟民の場合、結果をみてダメなら、また別な方法を考えるか、元の方法に戻ればよく、そのすべては自己の判断による。従って、猟の成績を左右するものは各自の積極性及び個人それぞれ能力、すなわち個性にかかっているのである(芝垣)。このような生活習慣を背景にもつ社会においては、それぞれ各人が個性的であり、新しいものを積極的にとり入れ、前向きな姿勢であることが望ましいという価値観が育つことになる。そして、自分からやる気になって積極的に行動するのであれば、それは何であれ「良い」はずであり、「楽しい」はずであり、「元気で」「リラックス」できるはずなのであるから、「ご苦労」や「お疲れ」や「大変」なはずはないということになる¹⁴。

企画会議の後の場面3で、“It’s looking good, isn’t it?”(4番)(面白そうですね)、“Great meeting. Let’s get this thing rolling”(6番)(良い会議でしたね。この企画を進めましょう)、“Well, that was something, wasn’t it”(7番)(いやー、たいしたものですね)、“Well, we’re off to a good start”(8番)(なかなか出だしは好調ですね)、“I can’t wait until we get started”(10番)(早く始まらないかと待ちきれない程ですよ)の様な前向きな表現が半数以上の60%の回答に見られるのは、会議が好ましいものであり、企画は期待に満ちたものであると受けとめる姿勢が背後にあるからにほかならない。

このような姿勢が表れている表現は、仕事の文脈だけにとどまらない。それは趣味で園芸をしている友人に対しても当然多く用いられている。“Have fun”(1番)(楽しんでね)や“Enjoy your gardening”(3番)(園芸楽しんでね)等、「楽しむ」ことを強調する表現、“Take it easy”(6番)(あまり根を詰めないでね)、“Don’t work too hard”(7番)(そんなに頑張らないで)等の「リラックス志向」の表現、“Good day for it”(9番)(園芸には良い日ですね)、“Well, nice talking to you”(10番)(お話できて良かったわ)、“Your garden always looks great”(11番)(お宅の庭はいつもきれいですね)等の友好的・社交的表現等がそれであり、66%の回答を占めている。

別れの挨拶言葉においても英語では相手に快適で楽しい時を願う表現がほとんどである。前述したように、日本語の別れの言葉は、目上の人に対してや、かしこまった場面では「失礼します」¹⁵であり、もう一つは「勤労志向」の「お疲れさまでした」や「ご苦労様でした」等であったが、この“ねぎらい型”の代表である「お疲れさまでした」は“英訳”すると“You must be tired”または“You’ve tired yourself out”になる。前者は、普通“You must be tired after working all day”（一日中仕事をした後だから、疲れているに相違ない）等というように原因を示す副詞を伴って用いられ、その後に“That’s why you can’t/don’t…”（だから～ないのですね）等のような否定的で批判的な意味が想定される時に使われることが多い。後者は単に「あなたはすっかり疲れているのですね」と相手が働きすぎたことを述べているにすぎない。どちらの表現にも日本語の「お疲れさまでした」が意味するもの、つまり相手の疲れに言及するだけでなく同情と感謝をもって、同じ共同体の成員としての目に見えない糸を確認し合い安心し合う意味合いは含まれていない。英語圏の人々の背後にある価値観が、各自個人個人が積極的で元気で自発的に物事を処理するのが望ましいというのであるなら、「疲れたに違いない」等と察することは、この前提に反することになる¹⁶。従って、英語では相手を“ねぎらう”より、相手の領域に立ち入らず、「楽しい夕べ」や「楽しい園芸」を相手のために願う表現の方が礼儀にかなう、好まれることになるのであろう。

仕事の後、職場の人と別れる場面で、“Have a nice evening”¹⁷（1番）（良い夕べを）や“Have a good day”（3番）（良い一日を）が用いられており、また町内会のお知らせの後、電話を切る時にも“I hope to see you there”（6, 9番）や、“Look forward to seeing you”（8番）（そこで会うのを楽しみにしています）が回答として使われているのもこの「快適志向」を反映している。

試験に臨む友人を見送る場面の回答は“Good luck”（1, 2番）が最も多く、74%を占めていたが、これも相手のために文字通り「幸運」を願うという意味であり、自分と相手の間のつながりを示唆する糸は見えない。この場面でこの他に、“Knock’em dead”（5番）（先生に「参った」と言わせておいで）や、“Go get’em”（7番）（さあ、行ってうまくやってきな）等のような冗談めかした回答もあったが、これらは試験に臨み、もうすでに充分緊張しているであろう友人をリラックスさせるためであり、更に奮起激励をするためのものではない。

このような「リラックス志向」は日本語の「頑張ってね」が使われる場面についてもいえる。日本語のこの表現が集団との関わりを背景にした「勤労志向」の激励であるのに対し、積極性・自発性を重んじお互いが確立した個であるとみなす英語圏社会において「頑張ってね」はお説教がましく、余計なお世話と受けとめられる（松本）。それだけでなく回答者が特記しているように、失礼にすらなり得るのである。彼らにとって望ましい姿とは、例え困難に直面したとしても誰かの激励に頼ったり、「頑張らずとも」自力で切り開ける能力があるということなのである。自分がそういう人間であれば、余裕を持ってことに臨めるから、「楽しんで」「リラックスして」いるということを強調する必要があるのである。日本人なら緊張して当然な場面でジョークが好まれるのも緊張していないことを示すためにほかならない。そうすることによって自分が大物であることの証明になるのであり、緊張している様は余裕のなさとして、むしろ否定的にとらえられるのである。このような価値観はまた未来を楽観し、自らの力で状況を変えようとする積極的な姿勢を良しとすることにつながる。この姿勢は悩みを持つ友人に対するアドバイスに反映されている。

この場面では、“Don't worry. Everything will be all right” (1番) (心配しなさんな。すべてうまくいきますよ)、“Take it easy. You'll get over it” (2番) (気を楽しにして。立ち直れますよ)、“Don't worry. I'm sure it will turn out OK” (6番) (心配しなさんな。きつとうまくいくよ) 等のような楽観的で前向きな回答が、54%であった。

フィットネス・クラブでの英語の回答の内、34%は“Keep trying” (4番) (やり続けろ)、“Hang in there” (8番) (そこに踏みとどまれ)、“Keep it up” (9番) (気をゆるめずに続けろ)、“Keep going” (5、10番)、“Stick with it” (11番) (こつこつと続けろ) 等、あえて“和訳”すると日本語の「頑張ってね」に近い表現もあった。しかし、これらの表現が使われる場面では複数の回答者が「フィットネス・クラブの教官が、練習している人に言う場合には文字通りの意味を帯びるが、それ以外では親しい友人に冗談として言う」と特記しているように、実際は本気で激励はしないのである。それを裏付ける、からかい半分の表現はまだある。“No pain, no gain!” (13番) (骨惜しみしては何も得られないよ)、“Some days are more difficult than others” (14番) (キツイ日もたまにはあるさ)、“Yo heave ho!” (15番) (エーンヤコーラ) 等。この他2人の回答者は“I wouldn't encourage him” (その人を励まそうとは思わない) とか“Probably nothing” (多分、何も言わない) と答えているし、もう一人の回答者は“Probably nothing—it could be bad manners” (多分、何も言わない。言うとは失礼になる) とまで言っている。

以上、日本語の回答から「お疲れさまでした」や「ご苦労さまでした」等の“ねぎらい型”の表現や「頑張ってね」等の相手を激励する表現が、仕事や職場の場面だけでなく、趣味の園芸をしている人や、フィットネス・クラブで運動している人に対しても用いられていることがわかった。これらの表現は勤労のイメージと絡み合っており、共同作業が大前提であった農耕民的文化に起因する「お互い」意識や、同じ共同体の成員としての集団意識がひそんでいられると思われる。

一方、これらの場面における英語の回答には、例えば“‘We're off to a good start’”、“‘Have a nice evening’”、“‘Take it easy’”、“‘It'll be all right’”、“‘Good luck’”、等が使われており、英語圏の人々の積極的・楽観的・前向きを良しとする価値観が反映されていた。これらの回答はまた、確立した個であるべき相手の領域に介入せず、快適な時を願うことで人と人との間のことを終える姿勢やリラックスできることが余裕の表れと見る見方も投影されていた。

3 慣用的表現 対 個別的表現

今回の日英語の挨拶表現の調査結果を概観してみると、回答の数と表現内容の豊富さの点で日本語が勝っている場面はただ一つだけであることがわかる。このただ一つの例外とは先生にお茶をだしてもらいお礼を言う場面である。日本語では「すみません」「恐れ入ります」「申し訳ありません」「あがとうございます」等、謝意を表すさまざまな表現が使われていたが、英語では“Thank you”、“Thanks a lot”、“Thank you very much”等の感謝の言葉だけであった。この場面以外では英語の方がその数も表現内容のバラエティーの点からも圧倒的に多かった。この違いはどこからくるのであろうか。

挨拶とは対人関係を円満にし、維持強化するための社交・儀礼的行動様式の一つであり、日本人も英語圏の人々も、日々挨拶を交す時に礼儀にかなない、相手に不快感を与えないよう丁寧に、と心がけている点では共通している。しかし、丁寧であることが何なのかは文化によって異なっている。

「礼儀正しい、丁寧な、行儀の良い」¹⁸に“対応”する英語は polite であるが、英語を母語とする人々にとっての polite と日本語のこの訳語の意味するところほどの程度重なり合うのであろうか。

Robin Lakoff は著書 *Language and Woman's Place* の中で英語圏の社会において「礼儀正しく丁寧で行儀がよい (polite)」ということが言えるのは次の三つの場合である、と述べている。すなわち、

- (1) 形式ばって儀礼的なこと (formality)
- (2) 相手に敬意を表すること (deference)
- (3) 連帯意識を強調すること (camaraderie/solidarity) である。

(1) は礼儀・作法にあたり、相手との間に距離を置くことであり、例えば、会話で Mr、Dr、Sir 等の称号を使う場合をいう。(2) は相手を上位に扱い、話し手は言い淀んだり口ごもったりすることによって、相手に決定権を与えることをいう¹⁹。(3) は自分と相手が親しい友人関係にあり、形式ばる必要がないということを示すもので、例えばファースト・ネームを用いたりする場合である。Lakoff は、(1) と (3) は両立しないが、(2) と (3) は同時に起こり得るとし、英語圏社会において (3) のお互いが親しい間柄であるということ意志表示する態度は、確かに polite であることの一部であると指摘している (Lakoff、65-68頁)。日本人にとっては (1) と (2) は polite の訳語に、ある程度対応するけれども、(3) はこの訳語の中には見い出せない。(3) の意味するところは日本ではむしろ「くだけた」、あるいは悪くすると「なれなれしい」と認識されることが多い部分である。

英語圏社会における「Polite であること (Politeness)」とは何なのかについて Brown and Levinson は *Politeness* の中で、Positive Politeness と Negative Politeness という二つの概念を用いることによって詳しい理論的考察を行っている。Positive Politeness とは、ひとことで言うならば「連帯意識の表明」(the expression of solidarity) である。相手をよく理解しており、相手の求めているものを良しとし、自分も相手と似かよっていることを強調することが英語圏社会では polite になるというのである。似ていると感じればこの姿勢は初対面の人にも向けられ、相手に近寄りたという気持ちを積極的に表すことだといえる (Brown and Levinson、101-103頁)。

Negative Politeness とは、簡単に言えば「相手を尊重する態度の根幹」(the heart of respect behavior) である。お互いの積極性・自発性を重んじ、それぞれが確立した個であるとみなすことを前提としており、相手の自由意志や行動を制約したり邪魔をしたりしないことが polite であると言う。Positive Politeness が相手への歩み寄りを目指しているのに対し、Negative Politeness は相手との間に距離を置こうとする態度である (Brown and Levinson、129-130頁)。

Brown and Levinson が Positive Politeness の方を先に取り上げ強調しているものは、先ほどの Lakoff の言う(3)の連帯意識と基本的に同じである。つまり英語圏社会において、連帯意識、仲間意識を積極的に表明することは polite なふるまいとして、彼らの意識の根底に横たわっているのである。日本人にとって、Negative Politeness の方は polite な態度としてある程度納得がいくが、Positive Politeness の方は、むしろ「なれなれしい」と否定的に受け取られることが多いため、英語圏の人々の polite のイメージとズレが生じることになり、このズレが日英語の挨拶表現の内容の違いの原因となっている。

親しみを言動に表すことを「礼儀にかなない、丁寧である」と評価しない日本社会におい

て、挨拶表現は自ずと「なれなれしさ」を排除したものとなり、親しみを表すというよりは相手との距離を意識し、敬意や謝意を示すことに重点が置かれた儀礼的で形式的なものになる²⁰。

今回の調査で日本語の挨拶表現が、一つの例外を除き、数の点でも表現内容の豊富さの点でも英語に比べると少なかったことは前にも述べたが、全体の回答に表れた代表的なものを挙げると、「よろしくお願いします」「申し訳ありません」「頑張りましょう」「頑張っ
てね」「すみません」「ごめんなさい」「恐れ入ります」「失礼します」「ありがとうございます」「お疲れさまでした」「ご苦労さまでした」「ご精がでますね」の約12に集約される。これらの表現の内容を見ると、敬意、依頼、詫び、激励、謝意、感謝、ねぎらいといったもので、親しさを示す表現はない。また、これらは「決まり文句」と呼ばれる、社会が用意した「慣用的表現」であり、回答者の作ったオリジナルではない。

日本には状況に合わせて皆が使うこれらの「慣用的表現」があり、それを慣習に従って、折り目正しく、要所要所で発することが「挨拶のできる人」であり、一人前の社会人として認められることになる。挨拶は儀礼的になればなるほど型や形式に従うようになり、「何を言うか」ということより、他の皆が言うようなことを「言うか言わないか」ということの方が重要になるのである(比嘉:1981)。そして定型化した「慣用的表現」は本来の意味合いが薄れ、文字通りの意味は大した重要性を持たなくなる。それは、町内会のお知らせの後電話を切る場面での回答の中で、実際に何かを依頼したり、頼りにしていることを強調する必要がないのに「よろしくお願いします」が使われていたことからわかる。日本社会においては、このような「慣用的表現」がお互いをつなぐ潤滑油として機能している。

もう一つ日本語に特徴的なものは、日本語の回答が全般的に短いということである。例えば、レストランでウェーターを呼ぶ場面で全回答中87%使われていたものは「すみません」(1番)と「ちょっと」(3番)という短い言葉である。また、通りで人とぶつかり詫びる場面でも「ごめんなさい」(1番)、「ごめんなさい。すみませんでした」(3番)、「すみません」(4番)という短い詫びの表現が合計82%あった。

「慣用的表現」は使うけれども、このようにあまり多くを言わないということの背景には、あえて口に出さずともその場の状況で判断がつくことには、わざわざ取り立ててしゃべらない方が良いという前提があるからであろう。世界でも珍しいほど同質均等的日本社会では、口に出さずとも他の人が何を望み、何を言いたいのが以心伝心的にわかることになり、わかりきったことをしゃべることは、むしろくどくどしく、野暮ったいとすら思われる。それどころか、口数少なくあまり説明をしない人の方がかえって信頼されることもあるくらいである。日本社会では「慣用的表現」だけを上手にさばくことで用が足りるともいえるのである。

英語の回答には「決まり文句」も含め、実に多彩な表現が目立った。英語圏社会においては、前述したように、連帯・仲間意識を積極的に表明することも polite であり得るため、「友人」の意味である friend の派生語の friendly という語が友人間にとどまらず、上下の間柄にある人にもほめ言葉となるのはこのためである。お互いが対等関係にあり、親しい友達であるとの前提に立てば、挨拶表現も社会が用意した儀礼的「セリフ」を使う必要がないのであるから、形式ばらない友好的なものになるであろう。このような社会においては、儀礼上発する「慣用的表現」は必要最小限度におさえ、個性味を盛り込んだ「手作り」の表現を使うことの方がむしろ礼儀にかなう(polite)ことになる(小林:1981b)。このような「決まり文句」への依存度が低い社会では、それだけ個人の裁量が問われ

ることになり、与えられた状況ごとに「個別的表現」を用いることによってお互いの連帯・仲間意識を確認することになる。従って、皆が言うことを「言うか言わないか」ということより、「何を言うか」が重要になるのである。

一日の仕事の後の別れの場面において、英語では“Have a nice (relaxing) evening” (1番)、“(Have a) good night” (2番)、“Have a good day” (3番)、“Have a good one, xx” (4番)等という別れの表現の他、“Don't work too hard” (6番)や、さりげない社交的雰囲気“ That was a long day, wasn't it? (5番)、“Nice to be out, isn't it?” (7番)、“Take care driving” (10番)、“Finished, have you?” (1番)、“Going home early, then” (12番)等、さまざまな回答が見られた。別れの「決まり文句」ともいえる“Have a~”でさえ、“~”の部分に個性味を加える余地が残されている。

企画会議の後、同僚に声をかける時には“The project is really moving along nicely. I'm very excited about it, as everyone, I think” (9番) (企画は順調に進んでいますね。胸がワクワクしますよ、皆さんも同じかと思いますが)、“Anyone, have time to celebrate?” (13番) (どなたか祝杯を上げに行く時間のある方はいらっしゃいませんか)、“Let's go for a beer after work” (14番) (仕事の後でビールにでも行きましょう)等、それぞれの人が、それぞれの言い方で友好的で仲間意識を深めようとする表現を用いているのがわかる。

あまり親しくない知人からの電話を切る時には“It was nice talking to you” (1番) (お話できて良かったわ)、“Let's get together sometime” (3番) (いつか会いましょうよ)、“Talk to you again soon” (6番) (また近いうちにお話しましょう)等の回答が見られた。この場面で日本語の回答の73%が「失礼します」「ごめんください」「さようなら」「それじゃ、よろしく」「電話ありがとうございました」等、相手との間に距離を置いた儀礼的「慣用的表現」であったことを思えば、これらの英語の表現が、相手と話ができた喜びを伝え、相手にまた会いたいという気持ちを積極的に示す friendly なものであることがわかる。

また、町内会のお知らせの後でも、“I hope to see you there! It should be a fun time” (6番) (そこでお会いできるのを楽しみにしています。きっと楽しいはずですよ)、“I hope you can still make it” (7番) (日程が変わったけれども、来れることを願ってます)等、日本語のこの場面での「よろしくお願ひします」と比べると友好的・社交的雰囲気を帯びており、相手をあたかも親しい友人であるかのように応対することを polite とみなす背景が反映されている。

その場の状況でわかることは、あえて口にせずとも察することが期待されている日本人と異なり、徹底した個の立場からものを考え、相手の気持ちを察する土壌のない英語圏社会においては、わかってもらうためには具体的に言葉で示さなければならないことになる。

面接試験のため入室する場面で、英語では“Good morning”や“Hello”の他に“I'm here for my interview. I appreciate this opportunity” (1番) (この面接のために来ました。この機会を与えてくださったことを感謝しています)、“I'm here for the job interview with you” (4番) (あなたとの面接のためにここに来ました)、“I'm xx: I'm applying for the xx position” (6番) (わたしは~です。~の職を希望して申し込みました)等、自分が何を感謝しているのか、なぜここにいるのか、をわざわざ述べたり、面接試験が終わって部屋を出る場面で、“Thank you for your time” (1, 2番) (お時間ありがとうございました)、“Thank you for seeing me today” (3番) (今日会って下さりありがとうございました)等、やはり何に感謝しているのかを各人の言葉で語っているのもこのためであろう。

その他、“I hope to see you again soon” (5番) (またお会いできるのを楽しみにしています)、“It was nice to meet you. I’ll look forward to hearing from you again” (6番) (お会いできて嬉しかったです。また連絡してくださるのを楽しみにしています)、“Well, it was nice talking with you today” (11番) (今日お話できてよかったです) 等、感謝の気持ちと将来への前向きな姿勢を言語化して伝えている。日本語に訳するといかにも“翻訳調”で不自然であり、なれなれしくさえ聞こえるが、英語圏社会において polite であるためには、その場にふさわしい自分の言葉で誠意を伝えなければならないのである (小林: 1981b)。日本語の回答では、入室時には「失礼します」と「よろしく願います」が94%、退室時には「失礼します」と「ありがとうございました」が100%であったことから見ても、日本社会においてはこのようなかしまった場面では一層儀礼的・形式的になる傾向があり、できるだけ余計なことは言わず、緊張した面もちでいる方が礼儀にかない、敬意を示すことにつながるようである。

言葉で具体的に示さなければ誠意が伝わらず、誠意をどれだけうまく通じさせるかで人間関係の密度が決まる社会において、言葉は重要視されることになる。それは言葉による自己主張、自己武装をも意味し、時には弁解がましく聞こえることにもつながる。

通りで人にぶつかりその人の鞆を落としてしまう場面で、英語では“I’m sorry”に続けて“I’m really in a hurry” (5番) (ごめんなさい。本当に急いでいたものですから)、“I’ve got a train to catch” (6番) (電車に乗らなければならないので)、“I didn’t see you” (8番) (あなたが見えなかったの) 等とぶつかった原因理由を述べる表現が25%あった。同じ場面で日本語では「ごめんなさい」「すみません」「申し訳ありません」等、謝罪の「慣用的表現」が単独で用いられている回答が90%であり、残りの10%の回答は「大丈夫ですか」と「怪我はなかったですか」の二通りであった。英語でも“Is everything okay? I hope nothing is broken” (7番) (大丈夫ですか。何も壊れていないといいのですが) のように相手を気遣う表現は使われているが、彼らは言葉を多く使うことによって誠意や自己の正当性を伝えようとする傾向があり、日本人はまず詫び、多くを語らず“弁解がましい”説明をするのを潔しとしないのがわかる。

言葉で自分をわからせようとし、相手が察してくれることを期待しない英語圏の人々の姿勢は、閉まりかけたエレベーターを呼び止める場面5にも表れている。「すみません」の項目中ただ一つ“Excuse me”も“I’m sorry”も使われていなかった場面である。日本語では「すみません」が78%の回答に用いられているが、英語では“Hold the door, please” (2番) (ドアを押さえていて下さい)、“I’m coming, wait!” (11番) (今、行きます。待って下さい) 等、前置きなしに直接何をしてほしいのかを伝える表現が回答の92%を占めている。この場面のように時間的に逼迫した条件のもとでは、日本語では儀礼的「すみません」が優先され、英語では儀礼的“Excuse me”が省略される。日本語では何れもあれ「すみません」と発することで足りるのであり、実際の用件はその場の状況から察してもらうことを期待する。英語では実際の用件を単刀直入に言葉で知らしめるのである。

その場の状況から判断できることはあえて言葉にせず、相手が察することを期待する日本人と、常に個として自己と他者とをとりえ、言葉で相手にわからせようとする英語圏の人々のこの特徴について、John Hinds は次のように述べている。

日本人は最小限の言葉を手がかりに、その場の状況や相手の気持ちを最大限に描き上げるが、英語話者はそのためには最大限の言葉を要する。

(Japanese speakers are more willing to construct to complete scenarios on the basis of minimal verbal clues whereas English speakers require maximal verbal clues.) (Hinds, 26頁)

アンケートの集計をするにあたり、様々な回答例を読んでいるうちに、興味深い事実が浮かび上がってきた。日本語の方は、回答例を読んでも回答者が誰なのかが最後のページに書かれてある名前を見るまで予想できないのであるが、英語の方は、読んでいるうちにそれが誰なのかがわかってしまうのである。英語の回答にはそれぞれの回答者の特徴が表れているため、筆者の知っている人ならば名前を特定するのはさほど困難ではなかったし、面識のない人の場合でも、その人のだいたいの性格が想像でき、それが当たらずとも遠からずであることは、その回答者を知る第三者から確認済みである。このことだけからも、英語の回答が全般的に個性味を加えた「手作り」の「個別的表現」であるということが充分納得させられた²¹。

日本語の場合はこれと全く対照的で、終助詞が使われているものに関してはその種類から、回答者が男性か女性かある程度の予測は可能だったが、その人の特徴なり性格なりをうかがわせるに足る個性的な表現はほとんど見られなかった。どの回答者の答を読んでも同じような「慣用的表現」がちりばめられていたからである。

以上、日本語の挨拶表現には敬意や謝意を示すことに重点を置いた儀礼的な「慣用的表現」が多く使われており、日本社会では「何を言うか」より、言うべき時にそれを「言うか、言わないか」が大切とされていることがわかった。また、日本人はその場の状況で判断がつくことには、あえて言語化せず、相手が察してくれることを期待し、共通の「慣用的表現」をうまくさばくことで、人間関係を維持しようとする傾向があることもわかった。

お互いが対等であるとの前提に立ち、相手を察する土壤がない英語圏社会においては、相手に近寄りたい気持ちや、親しみを積極的に示すことは丁寧 (polite) であり、それによって連帯意識の絆を確認する。相手と親しいことを強調するためには社会が用意した「決まり文句」は最小限に押さえ、個性味を盛り込んだ「個別的表現」を使うことになる。英語では「何を言うか」が大切であり、そのため状況ごとに各自が「手作り」の表現を創り出さなければならない。

6 おわりに

本稿では挨拶が非常に日常的な社会習慣にのっとった言語行動であるとの前提に立ち、調査結果に表れた日英語それぞれの挨拶表現を比較することで、日本人及び英語を母語とする人々の人間関係のとらえ方、価値観を探ることを目的として考察を試みた。挨拶言葉の中でも、特に日本人が頻繁に、また無意識に使っている「よろしくお願いします」「すみません」「頑張ってるね」「失礼します」が英語ではどのように表現されるのかをまず提示し、それを基に比較分析をした。その結果を特徴的にまとめると次のようになる。

(1) 農耕定住民的文化を土壤としている日本人は自分と相手との関係を依存的にとらえる傾向があり、そのため相手に敬意・謝意を示す表現が多い。一方、移動的狩猟民文化を背景にもつ英語圏の人々にとって人間関係の結びつきは選択的であり、互いを自律的個としてとらえるところから、対等関係を強調する表現や、友好的感情の表現が中心となっている。

(2) 日本語の回答にはねぎらいを示すさまざまな表現や相手を激励する「頑張ってね」等、勤労を是とする表現が多かった。同集団内での帰属感をこのような「勤労志向」の言葉を交わすことで確認し合う日本人に対し、英語圏の人々は会える喜び、楽しい時を願う表現等、リラックスできることを是とする価値観が際立っていた。

(3) 日本語には慣用的表現が多く使われ、「何を言うか」より、儀礼的「決まり文句」を言うべき時に「言うか言わないか」が対人関係を維持するのに大切とされているが、英語圏の人々には対人関係を対等であるとみなすところから、親しみを示す個人的アプローチが求められ、挨拶表現も個別的で具体的要素がより多く含まれていた。

以上、日本人及び英語を母語とする人々が無意識に使っている挨拶表現は日本及び英語圏それぞれの社会における人間関係認識法、価値観が背後にひそんでおり、それが表現内容の際立った違いとなって表れていることが明らかになった。日本語の挨拶表現を英訳するのも、また英語の挨拶表現を和訳するのも一筋縄ではいかず、不自然さを免れ得ないのは、日英語それぞれの表現がそれぞれの社会の対象世界の切り取り方の違い、文化に深く根ざしていることを物語っている。挨拶のようなお互いが無意識になされる言語行動は、この文化的背景を十分理解していなければ使いこなせず、無用の誤解を招く原因にもなり得る。お互いが無意識に期待している言葉を相手から聞けないことで、心理的に落ちつかない気分を引きずり、それが相手個人だけではなく英語を母語とする人々や日本人全体に対する評価につながることもなりかねないのである。

本稿で扱った場面と表現は限られたものであったが、異文化間コミュニケーションにおいて重要な部分を占める挨拶表現とその背後にある人間や社会に対する見方・考え方の関連を実証づける興味深い材料を提供してくれた。また、ここで明らかになった英語及び英語圏社会の特徴を鏡として、我々日本人が日頃空気のように当たり前と思い使っている日本語の挨拶表現とその依ってたつ日本社会の特徴をも浮き彫りにしてくれた。「外国を旅行して初めて自国のことが見えてくる」という言葉や、ゲーテの有名な「外国語を知らない者は自国語をも知らない」という言葉は今回の調査にとっても意味深いものがある。

注

- 1 「どうも」が使われる場面では、あいにく分析に足る結果が得られなかったため「考察」では、場面2で得られた結果を参照する以外は割愛することにした（「挨拶表現にみる日英語比較（中）」『東海女子短期大学紀要』第23号、1997を参照）。
- 2 Hudson, R. A. *Sociolinguistics*, Cambridge, Cambridge University Press, 1980, 104頁。
- 3 実際はおじぎと握手とは互いに等しい価値を持った行動ではない。日本人同士でおじぎをしても良い場合のすべてが、握手で置き換えることはできないからである。こちらが男性で相手が女性の場合は先方が手を出すのを待つことが期待される場合もある（鈴木：1973）。
- 4 英語の細かなニュアンスに関しては、同僚である英米人にご教示をいただいた。
- 5 『日本国語大辞典』小学館。
- 6 同上。
- 7 「ご無沙汰お許しください」とか「ご無沙汰して申し訳ありません」という表現は「人と人の絆が恒常的に結ばれているのが望ましく、会わないということはその絆が絶たれていることだから、その空虚な時間を埋め、絆の確認」（奥津、56頁）をするために使われると思われる。
- 8 前掲『日本国語大辞典』小学館。

挨拶表現にみる日英語比較（下）

- 9 日本人が英米人に対してお礼のつもりでこの「すみません」を無意識に英語に直訳し、“I’m sorry”と
いってしまい、“What are you sorry for?”（何のことを謝っているのですか）と、予期せぬ応答を受け
ることはよくある光景である。
- 10 前掲『日本国語大辞典』小学館。
- 11 後藤いく子、「挨拶表現に見る日英語比較（上）」『東海女子短期大学紀要』第22号、1996、96頁参照。
- 12 「どうも」の調査結果はすべての場面で予測に反していたのだが、注1で述べたように「考察」では割
愛したため、あえてこの項目については触れなかった。
- 13 前掲『日本国語大辞典』小学館。
- 14 日本語の「～をする」に対応する英語が、しばしば“enjoy～ing”と表現され、英語圏の人々に好んで
使われるも、「自分からやる気になってやっている」ことを示すためであり、この辺の事情を反映してい
ると思われる。
- 15 日本語の代表的な別れの言葉である「さようなら」は、「さようならば」という接続詞から発達したも
のであり、敬意が含まれていないため敬語とはならない（奥津）。
- 16 飛行機の長旅で到着した人に対して日本語では「お疲れになったでしょう」と言って迎えるのは相手を
ねぎらう丁寧な表現として、誰でも最初に思いつく表現であろうが、英語を母語とする人はこのような場
合“Did you have a good flight?”がまず反射的に出てくるといふ。そこにはいつも元気で疲れを知ら
ない意欲的な人を良しとする姿勢がうかがえる。
- 17 英語の“See you”や“Good bye”も“I hope to see you tomorrow”や“God be with you”の省
略形であるのだから、これらも単なる別れの言葉というより、自分の相手への願いをあらわしている希求
表現といえる。
- 18 『カレッジ ライトハウス英和辞典』研究社、1995。
- 19 アメリカ人が相手に決定権を与えることを丁寧（polite）であると考えていることは『「甘え」の構造』
の中の次の一節にも描かれている。「アメリカ人の家庭に食事に呼ばれると、まず主人が酒かソフト・ド
リンクいずれを飲むかとたずねてくる。そこで、酒を所望したとすると、次にはスコッチかブルボンかと
きいてくる。そのどちらかにきめた後、今度はそれをどうやってどのくらい飲むのかについても指示しな
ければならない。さいわい主なご馳走は出されたものを食べればよいのだが、それがすむと今度はコーヒ
ーか紅茶かをきめねばならないし、それも砂糖をいれるのか、ミルクはどうするか一々希望をのべねばな
らない。私はこれがアメリカ人の丁寧なもてなし方であるということはずぐにわかった。しかし内心では
どうだっというじゃないかという気がしきりにした」（土居、3頁）。
- 20 親子間、兄弟間、夫婦間で挨拶をすることは他人行儀とみなされるが、家庭内でも義理の関係にある人
たちの間では挨拶が取り交わされるのはこのためである。また、「日本社会で挨拶の一つとして抱擁が発
達しなかったのも、敬意優位の社会だった」（野元、8）からであろう。
- 21 日本語の食後の挨拶である「ごちそうさまでした」も、“対応”する英語が存在しない表現の一つであ
るが、Hinds はアメリカで、もし8人のアメリカ人が夕食に招待されたならば、食後に彼らがどの様な
言葉を挨拶として言うかについて次のようなものをあげている。
- 1 Oh, everything was delicious. (全部とてもおいしかったわ)
 - 2 Yes, I especially liked the soup. (本当に、私は特にスープがおいしかったわ)
 - 3 Mm, I think the vegetables were great. (ウーム、私は野菜料理がすばらしかったと思うわ)
 - 4 Oh, I've never had such good potatoes. (ええ、こんなおいしいお芋はたべたことがないわ)
 - 5 And the fish was fantastic. (魚も最高だった)
 - 6 Where did you get the wine? It was delicious. (ワインはどこで買ったんですか。おいしかったわ)
 - 7 Didn't you make the pie yourself? It was really good. (パイは手作りじゃないんですか？本当に
おいしかったわ)
 - 8 This coffee really hit the spot. (このコーヒーは丁度飲みたかったところなのよ、申し分ないタイ
ミングだわ)
- 8人のアメリカ人がこの通りの順序で言うとは限らないと断りながらも、Hinds はそれぞれの人が皆別々

の言い方をするであろうと述べている。アメリカではそれぞれの人が他の人と違う良い点を見つけ、その人らしい言葉で伝える (personalize the message) ことが重要だからである。彼が日本で初めて盛大なディナーに招待された時、食事が終わって自分以外の日本人が皆次々と異口同音に「ごちそうさま」と言うのを聞き、自分も結局「ごちそうさま」と言ったけれども気持ちを充分伝えた様な気がなくて心理的に落ちつかない気分だったと書き加えている (Hinds、24-25頁)。

参考文献

- 荒木博之. 『日本人の行動様式』講談社、現代新書、1973.
 ————. 『日本語が見えると英語も見える』中公新書、1994.
 石田英一郎. 『東西抄』筑摩書房、1967.
 奥津敬一郎、沼田善子. 「日・朝・中・英のあいさつ言葉」『日本語学』明治書院、8月号、Vol. 4、1985、53-69頁.
 小林祐子. 「日本人とアメリカ人の挨拶行動—出合いの挨拶」『東京女子大学附属比較文化研究所紀要』1981a、42号.
 ————. 「英語の挨拶行動」『英語教育』30-10、大修館書店、12月号、1981b.
 芝垣哲夫. 『言語と文化の構造』創元社、1986.
 鈴木孝夫. 『ことばと文化』岩波新書、1973.
 ————. 『ことばと社会』中央公論社、中公叢書、1975.
 ————. 『教養としての言語学』岩波新書、1996.
 外山滋比古. 『日本語の論理』中央公論社、中公叢書、1973.
 土居健郎. 『「甘え」の構造』弘文館、昭和46年.
 直塚玲子. 『欧米人が沈黙するとき』大修館書店、1980.
 野元菊雄. 「あいさつ言葉の原理」『日本語学』明治書院、Vol. 4、8月号、1985.
 日嘉正嘉. 「あいさつの言語学」『言語』Vol.10、No. 4、大修館書店、1981.
 ————. 「あいさつとあいさつ言葉」『日本語学』明治書院、Vol. 4、8月号、1985.
 堀素子. 「英語圏社会における Politeness 概念—日本社会との対比—」『東海女子大学紀要』第15号、1995.
 松本青也. 「「ガンバレ」と「Take it easy.」」『英語教育』大修館書店、Vol.43、No.12、Feb. 1995.
 『カレッジ ライトハウス英和辞典』研究社、1995.
 『日本国語大辞典』小学館.
 Brown, Penelope and Stephen C. Levinson. *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge, Cambridge University Press, 1987.
 Hinds, John. *Situation vs. Person Focus*, くろしお出版、1986.
 Hudson, R. A.. *Socioinguistics*, Cambridge, Cambridge University Press, 1980.
 Lakoff, Robin. *Language and Woman's Place*, Harper & Row, Publishers, New York. 1975.
 Matsumoto, Yoshiko. "Reexamination of the universality of face: Politeness phenomena in Japanese". *Journal of Pragmatics*, Vol.12, No.4, August 1988.
 Sakamoto, Nancy and Reiko Naotsuka. *Polite Fictions*, 金星堂、1982.